

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520125

研究課題名(和文) 在日欧米人ネットワークと戦後日本美術の評価 英文ジャーナリズムを中心に

研究課題名(英文) Western expatriates in postwar Japan and their perception and evaluation of contemporary Japanese art: with focus on English-language journalism

研究代表者

桑原 規子 (KUWAHARA, Noriko)

聖徳大学・文学部・准教授

研究者番号：90364976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、1945年から1965年の間に日本に滞在した欧米の美術関係者(おもにアメリカ人)に関する資料収集やネットワークの調査、日本で出版されていた英字新聞の美術関連記事のデータベース化や分析を通して、在日欧米人が戦後日本美術に与えた評価とその波及効果について検討した。また、GHQが日本に設置したCIE図書館が、占領期の日本の美術界に果たした役割についても検証し、戦後日本美術をめぐる状況を、おもに米国との関係から多角的に研究、その成果を論文やシンポジウムで発表した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the ways in which postwar Japanese art was perceived and evaluated by Western expatriates living in Japan between 1945 and 1965, and the ripple effect of such evaluation. The methods employed were: collecting information on significant individuals (mostly American) and their interrelationships; creating database of art-related articles in English-language newspapers published in Japan; and analyzing those articles. Also considered was the Civil Information and Education (CIE) libraries which were set up by the Occupation Force and served as source of information for Japanese artists, art scholars and critics. The study thus considered from diverse angles the environment for arts in postwar Japan, and communicated the outcomes through publications and a public symposium.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学美術史

キーワード：日本美術史 美術批評 占領期 英字新聞 CIE 国際情報交流 アメリカ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者桑原規子は研究課題「戦後日本版画の世界進出と国際交流 展覧会・コレクター・作家交流」(平成 20 - 22 年度科研費)に基づき、日本の版画が国際的に注目され、評価された絶頂期ともいえる 1950 年代から 1960 年代を中心として、日本版画の世界進出と国際交流の実態を多角的に検証した。この研究は「版画」を対象を絞って進めたものであったが、その過程で戦後在日欧米人が日本版画の評価に深く関わっていた点が明らかとなった。したがって本研究は、戦後の版画研究を土台として、その枠組みを版画から日本美術全体へと拡大し、発展的に研究したものである。

また一方、研究分担者五十殿利治が、「近代日本美術史と英文美術ジャーナリズム 英語版美術年鑑、英字新聞を中心にして」(平成 17 - 19 年度科研費)で、戦前の英文ジャーナリズムに関する知見を蓄積していたことから、本研究は戦前の美術批評研究を戦後へと拡大することも目指したものである。

1. 研究の目的

太平洋戦争が日本の敗戦で終わると、アメリカを中心とする連合国軍が日本を占領、東京は多くの進駐軍を受け入れ、主要施設を接收されることとなった。たとえば、第一生命ビルは連合国最高司令官総司令部 SCAP、東京放送会館は民間情報教育局 CIE、三菱仲 15 号館は東京陸軍教育本部 TAEC に、という具合である。これらの施設では多くの欧米人(おもにアメリカ人)が働いていた。

こうした占領期以後日本に滞在した欧米人の中には美術関係者(美術研究者、美術批評家、美術家、コレクターなど)も含まれており、彼らの一部は日本美術に関する書籍や雑誌・新聞記事を執筆し、戦後日本美術の評価に関わった。とりわけ注目すべき点は、彼らが個別に活動を展開したわけではなく、東京を中心とするネットワークを形成して、美術に対する興味や情報を共有・交換していた可能性が高いことである。

そこで本研究では、日本に滞在した欧米人の中でも特に美術に関係した人物とそのネットワークの調査、日本で出版されていた英字新聞や雑誌・書籍など英文ジャーナリズムにおける美術紹介や美術批評の分析を通して、在日欧米人が戦後日本の美術に与えた評価とその波及効果について検証することを目的とした。

2. 研究の方法

本研究は、研究代表者・共同研究者が個々の調査で蓄積した情報・資料を活用し、さら

にその枠組みを戦前から戦後へ、版画から美術全般へと広げることを目指したため、戦後美術研究に携わっている研究者を招聘し研究会を行うことで、互いの認識を深める方法を探った。また、課題の性質からして国内と海外での調査を並行して行う必要があったので、海外在住の研究者(味岡千晶氏)の協力も得つつ研究を進め、最終的にシンポジウムという形で研究成果を発表することとした。

なお、研究会やシンポジウム以外に各自が継続的に行った調査・研究の内容は以下の通りである。

- (1) 英字新聞の美術記事収集とデータベース化
- (2) 在日とネットワークに関する調査
- (3) CIE 図書館に関する調査研究

3. 研究成果

(1) 本研究においては、研究協力者も含めて複数回の研究会を開き、戦後日本の美術と米国の関係について討議を行った。話題提供は、光田由里氏(渋谷区立松濤美術館学芸員)の「国立近代美術館とアメリカ美術」、佐藤香里氏(現在・埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸員)の「GHQ/SCAP の文化政策 CIE 美術記念物課の人事と文化財保護」であった。こうした情報交換を通して浮き彫りとなったのは、CIE が美術にとって重要なセクションだったこと、国立近代美術館(現・東京国立近代美術館)とニューヨーク近代美術館とが緊密な関係にあったことである。在日欧米人ネットワークを調査する上で、これらの情報を得たことは非常に有益であった。

(2) 英字新聞の美術記事データベース化
研究期間 3 年間を通して、英字新聞の美術記事を収集、データベース化を進めた。収集した新聞は、Pacific Stars & Stripes, Japan Times, The Mainichi, Asahi Evening News である。目標は 1945 ~ 1965 年の 20 年間で、他の英字新聞も収集対象として挙げていたが、想像以上に分量が多く、すべてを終えることはできなかった。しかし、この作業を通じて、戦後日本に滞在していたジャーナリストの名前と情報を得ることができ、本研究は格段に進展した。なお、中尾信が在日欧米人対象に発行していた英文雑誌 Art Around Town も、全号ではないが収集することができた。

(3) 在日欧米人(美術関係者)とそのネットワーク

(2) の作業および関連資料の探索を通じて、在日欧米人 40 人のリスト化と各人の情報収集が進展した。関連資料はおもにアメリカの美術館および図書館のアーカイヴで収集した。3 年間に調査を行った機関は以下

の通りである。

ハワイ大学マノア校図書館、ホノルル美術館、北イリノイ大学図書館、ハーバード大学図書館、コロンビア大学図書館、ニューヨーク近代美術館図書館、スミソニアン・インスティテューション(アメリカン・アート・アーカイヴ)。

また、ハノーヴァーでは占領期日本に滞在した美術研究者エレン・コナント氏にインタビューを行い、戦後の在日アメリカ人に関する新たな情報を得ることができたので、今後調査を継続する予定である。なお、在日欧米人の中でも特に重要な役割を果たしたのが、*ジャパン・タイムズ*の美術批評家エリーゼ・グリリだが、彼女を中心とするネットワークの存在を解明することができた。

美術関係の主要な人物名：

ベアテ・ゴードン、ハリー・パッカー、ラングドン・ウォーナー、ジョージ・スタウト、ローレンス・シックマン、ハワード・ホリス、シャーマン・リー、ジェームス・プラマー、パトリック・ティアニー、ブルース・ロジャーズ、フランシス・ブレイクモア、ウィリアム・ハートネット、エルンスト・ハッカー、フランク・シャーマン、ドナルド・リチー、エスター・クレイン、エディス・ヴィーグル、エリーゼ・グリリ、オリヴァー・スタットラー、ネイサン・ポロウェツキー、チャールズ・タトル、メレディス・ウェザビー、ヒューゴ・ムンスターバーグ、ベス・ブレイク、シュヴァルリエ夫人、アントニン・レーモンド、ロナルド・ロバートソン、フランシス・ハール、ジェームス・ミッチナー(頻繁に訪日)。

(4) 日本人関係者

(3)の調査と共に、欧米人ネットワークを繋ぐ役割を担っていた日本人の存在も明らかとなった。美術家以外では、東京アーミー・エデュケーション・センターで展覧会企画に携わっていた山田智三郎、日本民藝館の柳宗悦、『*Art Around Town*』の発行者中尾信、養清堂画廊社長の阿部雄治、恩地孝四郎の長女三保子などが挙げられる。

(5) CIE 図書館

敗戦直後に情報センターとして設置された民間情報教育局 CIE の図書館は、国際的な美術の動向を知る貴重な情報源であったが、実際にどのような場所で、どのような図書が所蔵されていたのかは不明であった。とくに日比谷にあった図書館について、戦前の建築雑誌と比較して、おおよそどのような改築がなされたが把握され、また前川正男の訪問記によって美術雑誌の所蔵が判明した。CIE がアメリカ絵画の複製画の展示に活動の一環として取り組んだことも解った。

(6) 「戦後日本美術」をめぐるシンポジウムの開催

(1)～(5)で行った研究の成果を公開するために、2013年10月20日に戦後美術の研究者を招聘してシンポジウムを開催した。内容は、以下の通りである。

桑原規子「戦後の在日欧米人ネットワーク 英文ジャーナリズムを中心に」
五十殿利治「CIE 図書館と美術書」
味岡千晶(日本美術コンサルタント、在オーストラリア)「「三銃士」のアメリカ横断 1952 - 53 年リーチ・柳・濱田の米国巡回とその意義」
池上裕子(神戸大学)「モダンアートの地政学：ニューヨーク近代美術館による戦後日本美術の紹介とその評価」
長門佐季(神奈川県立近代美術館)「戦争 / 美術 1940 - 1950 モダニズムの連鎖と変容」展を終えて」

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

桑原規子「戦後の在日欧米人ネットワーク エリーゼ・グリリを中心に」『美術運動史研究会ニュース』(無)第142号 2014(1-8)

五十殿利治「CIE 図書館と占領下の美術界」『藝叢』(無)第29号 2014(1-17)

桑原規子「1950年代における日米版画の人的交流 斎藤清・関野準一郎・棟方志功を中心に」『近代画説』(無)第22号 2013(12-38)

[学会発表](計4件)

桑原規子「戦後の在日欧米人ネットワーク 英文ジャーナリズムを中心に」、「戦後美術をめぐるシンポジウム」(科研研究グループ主催) 2013年10月20日、於筑波大学東京キャンパス文京校舎

五十殿利治「CIE 図書館と美術書」、「戦後美術をめぐるシンポジウム」(科研研究グループ主催) 2013年10月20日、於筑波大学東京キャンパス文京校舎

桑原規子「戦後の恩地孝四郎とアメリカ人コレクター 海外所蔵作品と資料の紹介を兼ねて」、版画史研究会、2012年10月20日、於東京古書会館

桑原規子「The Creative Prints and Western art: Onchi Koshiro and his circle」、シドニー大学美術館・豪州アジア美術考古学センター共催によるシンポジウム、2011年5月6日、於シドニー大学

〔図書〕(計2件)

桑原規子『恩地孝四郎研究 版画のモダニズム』せりか書房、2012(1-575)

桑原規子「恩地孝四郎と西洋美術」『シドニーの日本：Japan in Sydney』University Art Gallery, The University of Sydney, 2011(107-111)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑原 規子 (KUWAHARA Noriko)
聖徳大学・文学部・准教授
研究者番号：90364976

(2) 研究分担者

五十殿 利治 (OMUKA Toshiharu)
筑波大学・芸術系・教授
研究者番号：60177300

研究協力者

味岡 千晶 (AJIOKA Chiaki)
日本美術コンサルタント(在オーストラリア)

光田 由里 (MITSUDA Yuri)
渋谷区立松濤美術館学芸員